

【書評】

伊藤裕康著『「提案する社会科」の授業5

出力型授業づくりへの挑戦』

(明治図書, 1997) 1957円

中村 哲

(兵庫教育大学)

本書は、「提案する社会科の授業」シリーズの第5集として、「提案する社会科」の実践的啓蒙を図る意図で出版されたものである。本書の目次は、3部構成とされ、次のようになっている。

I部「提案する社会」へのあゆみ

- 1章 主役はぼくたち!
- 2章 ぼくたちできるもん!
- 3章 共感から作戦へ、そして夢へ
- 4章 まず夢を、しかる後に現実を!

II部「提案する社会科」へのいざない

- 1章 「提案する社会科」の授業づくりの眼目は「提案のみがきあい」、それは社会とのすりあわせだ!
- 2章 KJ法を組みこんで「場外乱闘」を防ごう
- 3章 「提案する社会科」授業の分水嶺
- 4章 こうしたら「提案する社会科」カリキュラム構成

III部「提案する社会科」へのひろがり

- 1章 「新しい学力観」と道徳教育・「提案する社会科」との関係は?
- 2章 これが生活科と社会科を強化・発展させる授業づくりだ!

I部では、「ぼく・わたしたちの江戸幕府長生き大作戦〈小学校6年生〉」「お店屋さん大作戦〈小学校3年生〉」「米づくりの盛んなところは?—クロユキ方式誕生—〈小学校5年生〉」「小学校6年特活やった〜成立!ぼくらのクラブ活動〈小学校6年〉」等の著者自身が実践された授業例の紹介と「提案する社会科」との関連的意義づけが述べられている。さらに、「提案する社会科」の単元構成を踏まえた「あなたならどこにする?—じまん・探検・提案の児童館づくり—〈小学校3年〉」の社会科と『世界の1つの年賀状』からぼくらの御津南郵便局へ〈小学校2年〉」の生活科の授業例によって、「提案する社会科」として

の授業例を示している。

II部では、「提案する社会科」の授業づくりの際に直面する問題解決の方法として、「提案のみがきあい」の眼目理解とKJ法の活用が主張されている。前者の眼目は「提案もどき」と「提案する」社会科の違いを示し、「子どもたちの思いを社会認識のふるいにつなぎすましていく過程」が「提案する社会科」の授業づくりには不可欠とする。後者のKJ法は、提案意見乱立の「場外乱闘」の改善を図る方法とされ、「私は国土庁計画調査官」の授業での活用が述べられている。さらに、「提案する社会科」を軸にした小学校3年の年間計画案を示している。

III部では、「出力型授業観」に基づく「提案する社会科」と他教科・領域との関わりが考察されている。道徳教育としてはモラルジレンマ授業との目標・学習課題・子ども観・学習意欲・教師の役割・学習過程の共通性を指摘している。また、同様な視点から生活科との関連を考察し、生活科の授業においても「提案する社会科」の視点を組み込むことによって両教科の相互関連・発展が図られるとする。

このように本書では、「提案する社会科」の視点から著者の授業実践研究経過の意義づけ、授業づくりの方法、他教科・領域の関わりが述べられ、今後の教育のあり方として、出力型授業の強化・発展を力説している。さらに、著者の授業事例を裏づけにして、モデル授業例、KJ法の活用方法、年間指導計画を示しているところに実践的研究としての意義がある。しかし、「提案する社会科」の方法論の論述が、提唱者の主張や他科学の研究手法と他の教育方法等の内容を、無批判的に関連づける展開になっているので、理論的研究としての意義が乏しい。従って、「提案する社会科」の学習論的根拠の追究を期待する次第である。